

三国志

英雄ここにあり (上)

東田錬三郎

講談社版

三国誌 英雄ここにあり(上)

© Renzaburō Shibata

560円

昭和43年11月25日 第1刷発行

昭和48年5月12日 第4刷発行

著 者 柴 田 鍊 三 郎

発 行 者 野 間 省 一

発 行 所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(945)1111(大代表)

振 替 東 京 3 9 3 0

印 刷 所 豊国印刷株式会社

製 本 所 株式会社 国 宝 社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

目次

春日奇縁	一三
一劍に誓う	一九
鯨波あがる	二五
曹操出陣	三二
戦雲の野に	三八
檻車の囚人	四四
董卓無礼	五〇
義軍は往く	五七
秋風孤雁	六三
賢臣の死	六九
再び野へ	七五
暗雲みなぎる	

七五	六九	六三	五七	五〇	四四	三八	三二	二五	一九	一三	七
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

大將軍何進
流 螢
新 權 力 者
名 馬 赤 兔
呂 布 變 心
廢 帝 非 命
遁 走 行
逃 亡 者 陳 宮
拳 兵 十 七 鎮
孫 堅 が 往 く
酒 な お 温 か な り
激 突 虎 牢 関
呂 布 敗 れ た り

八二
八八
九五
一〇一
一〇七
一一三
一一九
一二六
一三二
一三八
一四五
一五一
一五八

業 火
敗走一水の間
離反陣
野望に躍る
白馬の若武者
巨星、墜つ
女色策
恋慕夫
絶纓の会
董卓討たる
伏竜児
大権いずれへ
徐州太守

一六四
一七一
一七七
一八三
一八九
一九五
二〇一
二〇八
二一四
二二〇
二二六
二三二
二三八

膳 脂 虎
長 安 最 後
旧 都 茫 々
襄陽の俊秀たち
二虎競食の計
酔虎荒れる
張 飛 遁 走
若魚は大河へ
小霸王奮戦
疾 風 陣
窮鳥、撃たず
丞相好色
質 天 子

二四四
二五一
二五七
二六三
二六九
二七五
二八一
二八八
二九四
三〇〇
三〇六
三一三
三一九

三
国
志

英雄
こ
こ
に
あ
り
(上)

装幀・さしえ 山崎百々雄

春日奇縁

一

おどろいたことであつた。

人間が、空から降つて来たのである。

幽州・涿郡の、蟠桃河に沿うた往還上であつた。

地べたにたたきつけられると、奇妙な絶鳴をもらして、もうビクとも動かなかつた。胴につけた鉄鎧がぐしゃりとつぶれたのである。弓矢を背負い、剣を携げた兵卒であつた。

眼前に、こんな珍事が起れば、たいがいのは者は、仰天するところである。

ところが――。

いま、ここへさしかかった目撃者は、黙然として、立ち

どまっているだけであつた。

「売物らしい履と蓆を積んだ驢馬を曳いた青年であつた。まづしい装をして、無腰である。」

不意をくらつて、茫然自失したという次第ではなかつた。

澄んだ双眸は、冷たく、血反吐を吐いた兵卒の、頭に巻かれた黄色の巾を、視ていたのである。

つづいて、また、恐怖をこめた絶叫があがつたかと思うや、第二の犠牲者が、青年の眼前へ、落下して来た。

同じく黄巾を頭に巻いた兵卒であつた。

青年は、渠らが投げとばされた場所が、左方の城壁の向う側であるのを知つて、視線をめぐらした。

その視線の中へ、ぬっと、人影が出現した。

途方もない巨大な漢であつた。

豹頭環眼とはこういう偉丈夫を指して、いうのである。常人のまなこの三倍はあろう。それが炬火のような光を放っている。頬から頤にかけては、漆黒の髯が、波うっている。

小脇に、ぐつたりと氣をうしなつた若い女をかかえていた。

城壁——といつても、すでに崩れて、石塊の山でしかなくなつていたが——その上に、仁王立つた偉丈夫は、驢馬を曳いている青年を、じつと見下した。

青年も、べつに、怯^{おそ}じずに、見上げている。

と――。

偉丈夫は、

「おい、履^{はき}作り――」

と、呼んだ。巨軀^{こくう}にふさわしい大層な大声であった。

「たのみがある」

「なんでしょうか？」

「この娘を、校尉^{こうゐ}のところへ、つれて行^いつてくれ。礼^{れい}がもらえるぞ」

云うや、いきなり、偉丈夫は、娘を、抛^なつた。

娘のからだは、花の束^{たば}のように、驢馬^{ろば}の背^せへ、かるがると落ちた。

青年は眉宇^{めいぶ}をひそめ乍^{はな}ら、

「この少女は、校尉^{こうゐ}鄒靖^{そうせい}殿の娘御ですか」

と、訊^きねた。

「そうだ。校尉^{こうゐ}鄒靖^{そうせい}が、この幽州^{りゅうしゅう}の劉焉^{りゅうえん}の命令を奉じて、

黄巾賊征討の高札を、城内にかかげた。それを怒った黄巾

賊どもが、鄒靖の娘を、かどわかった。ここまで、つれて

来たところへ、おれが、通りかかって、救^{すく}ってやった、と

いうわけだ」

「では、この少女を、お手前ご自身が、校尉^{こうゐ}邸^{てい}へつれて行

かれれば、よろしいではありませんか。私が、つれて行^いつて、礼^{れい}を頂くのは、筋^{すぢ}ちがいです」

「つべこべ、云うな―― つれて行^いけ、と申したら、つれて行^いけっ！」

偉丈夫は嗷^お鳴^なつた。

「お手前は、どうなさるのです」

「おれか、おれは、べつに、どうもせん、城内へもどつて、どこかで、酒をくらって居るわ」

「尊名を、おうかがいしておきます」

「姓は張^{ちやう}、名は飛^ひ、字は翼^{よく}徳^{とく}。……飲^いんだくれの百人力、

ときけば、おれがどこで飲^いんでいるか、すぐわかるぞ」

「そうですか。私は、劉備^{りゅうひ}という者です。では、ご依頼によつて、この少女を、校尉^{こうゐ}邸^{てい}まで、つれて行きましよう」

青年が、歩き出すと、

「おい、待^{まち}つた――」

張飛^{ちやうひ}が、三間を跳躍して、往還上へ立った。

青年が、ふりかえつて、

「まだ、なにか、ご用ですか？」

「念^{ねん}のために、忠告しておくぞ。城内に入るまでの途中、

邪念^{じゃねん}を起すな」

「邪念とは？」

「この娘を、わがものにしてやろうとか、黄巾賊に売って

やろうとか――そういう邪念^{じゃねん}だ」

「そのような懸念^{けんねん}がおありならば、ご自身で、つれて行^いかれるがよろしいでしょう」

「いや、念のために、忠告しておくのだ。そう愼^{しん}るな」

張飛は、柄にもなく、青年の冷たく澄んだ眼眸を受けると、眩^{くら}しそうに、まばたきした。案外、好人物のようであった。

「人を、一度信頼されたならば、よけいな忠告はなさらぬことです」

青年の態度には、凛^{りん}としたところがあった。

「いや、わるかった。許されい」

張飛は、思わず、頭を下げた。

頭を下げてから、自分のやったことに、張飛は、きよとなつた。見知らぬ他人に頭を下げる、などということとは、生れてこのかた、一度もやったことがなかったのである。

——これは、おどろいたわい！

張飛は、自分で自分のやった行為に、いささか、あつけにとられたかたちであつた。

張飛は、遠ざかつて行く劉備という青年を見送り乍ら、しきりに、首をかしげていた。

あの青年に、この張飛の頭を自然に下げさせる威厳が、どこかにそなわっていたのか。それとも、自分が、うっかり、頭をさげてしまったのか。

「ふむ！ わからん！ どうも、わからんわい！」

張飛は、いまいましげに、呶鳴^{なうめい}った。

二

時代は、後漢の光和元年の頃であつた。

洛陽の皇帝は、靈帝であつたが、暗愚で、家臣の良惡を視る目を持たなかつた。官廷内には、張讓・趙忠ら十人の内官（宦官）がいて、これらがことごとく奸佞^{かんねい}の徒で、權勢争いに終始して、十常侍と号されていた。靈帝は、これらの奸臣の正体を看破できずに、十常侍の首席にある張讓を尊信して、「阿父^{あふ}」

と、呼んでいた。

このような暗愚の皇帝を、上にいただいていて、天下が平和であるわけがなかつた。

天下の人心は乱を望むようになり、盜賊の群は、八方に蜂起^{ほうし}していた。

就中、野火のごとく、諸方を侵掠^{しんりやく}して、暴威をふるって

いるのは、黄巾党という盜賊軍であつた。

鉅鹿郡に、張角、張宝、張梁という三兄弟があつた。長兄の張角は、百年に一人、といわれる秀才であつた。某日、山中に藥草を採りに入って、一老人に遇つた。

あかぎの杖をついた碧眼童顔の老人は、張角を喚んで、とある洞窟に、ともなつた。

そして、三卷の天書を授けて、

「これは、太平要術という書物である。その方が、この術を学び、会得したならば、天に代って、人民を救うことができるであろう。但し、もし万が一にも、異心が萌したならば、その方は必ず悪報を受けて、身を亡すであろうゆえ、くれぐれも心せよ」

と、諭した。

張角が、その書物を拝受してから、老人にその姓名を問うと、

「われは、南華老仙と申す」

と、こたえ、忽ち一陣の清風となって、飛び去った、という。

張角自身が、山を降りて来て、その口から、そう語ったのである。真偽のほどは、誰にも判らなかつた。

張角が、その日から、門を閉して、三年間、屋内にとじこもったのは、事実である。

張宝、張梁の弟たちは、長兄が、よく風を呼び雨を喚ぶ神仙の術を会得しはじめた、とふれまわった。

たまたま、その年——中平元年正月、疫病が大いに流行して、死者が続出しはじめた。

張角は、好機到れり、とばかり、門から立ち出て、符水（ふみづ）をほどこし、大賢良師の旗をかがけて、その旗の下に集る者は、死神から、まぬがれると説法してまわった。

弟子が五百人集るや、張角は、弟子たちに、符を書くこ

とと、咒（まじ）を念ずることを教えて、四方に雲遊させた。

部下をかき集めるには、まことに巧妙な手段であつた。

五百人の弟子たちは、悪疫の諸州を経巡って、数年のうちに、それぞれ、千人、二千人の部下をつれて来た。

張角は、弟子たちを三十六の方に仕立て、大方には一万余人、小方には六七千人を据え置き、それらに隊長を設け、將軍の称呼をさずけた。そして、おのれは、その大軍の上に君臨して、大賢良師張角、と号した。

世人が、この徒党を、黄巾賊と呼んだのは、全軍が黄色の旗をかがけ、全兵が、黄巾で頭を包んだからであつた。

その旗には、

蒼天すでに死す

黄夫まさに立つべし

歳、甲子にありて

天下大吉

と、記し、これを歌にして、全兵にうたわせたので、しぜんに、郡県、市鎮から宮觀、寺院の中でまで、この唄声がひびくようになった。

こうなると、人民は、單純であつた。

すべての疫病は、大賢良師張角と書いて、敬い貴ぶならば、たちどころに治癒する、と信ずるようになった。

当然——。

張角には、政治上の野心が、鎌首（かみくさ）をもち擡（た）げて来た。

暗愚の皇帝を思いのままにしている十常侍を、こちらに抱き込めば、天下を奪うのは容易であろう、と非分の野望を起した張角は、大方（隊長）の一人の馬元義に、金銀を持たせて、洛陽へおもむかせた。

しかし、いかに頽廢と内紛で、乱脈をきわめているとはいえ、後漢十二代の官廷が、一邪教祖の野望の企てに、ゆるぐ筈はなかった。

馬元義は、逮捕されて、首を刎ねられた。

つまり、張角は、莫大な金銀だけを損をした結果になった。

これが、張角をして、憤怒させた。

「よし！ 官廷側が、賊にひとしい振舞いをするならば、この張角が、目にもみせてくれる！」

自ら天公將軍と号し、張宝を地公將軍、張梁を人公將軍と号せしめ、諸州から兵を集め、四十余万の勢力を得るや、放火、殺戮、掠奪——ほしいままな猛威をふるった。地頭も官吏も、防ぐてだてもなく、逃げかくれた。

富豪たちは、進んでみつぎものをして身の安泰をはかたし、民家では、門口に、大賢良師と記した黄符を貼りつけて、服従を誓ったし、食いつめた男たちはよろこんで兵となつて、悪業に加つた。

大將軍何進は、張角を誅戮すべく、帝に奏して、十余万の軍を動かしていた。

しかし、張角の神出鬼没の行動に、いたずらになやまされて、まだ、追いつめることさえできずにいた。

——そういう時代であった。

三

陽が西に傾いた頃あい——。

青年劉備は、驢馬を曳いて、城内中央の辻を、横切ろうとしていた。

驢馬の背から、履も蓆も、そして娘の姿も消えていた。

娘は、この城内を治めている校尉鄒靖の館の門前に、そつと置いて来たし、履と蓆は、問屋へ売って来たのである。

娘は、驢馬からおろされた時、意識をとりもどし、わが家の門前に置かれると、涙をうかべて、劉備に合掌して、感謝した。

せひ、父に会つて欲しい、父の口から礼を云わせたい、と願う娘に、劉備は、笑つて、かぶりを振つて、その場を去つて来た。

自分が救つたのでもない娘を、送りとどけただけで、礼をもらふなどということは、この潔癖な青年には、絶対にできなかった。

劉備は、辻を曲つて行こうとして、ふと、そこに、高い榜が立っているのを、みとめた。

校尉鄒靖の名で、近頃、黄巾の賊が、この幽州の境をも
侵しおびやかすようになったゆえ、義勇の士はすみやかに、
武器を把^とつて立て、という檄文^{げきぶん}が記してあった。

しかし、高榜^{たかぼう}の前は、人影はなく、さむざむと、早春の
夕陽が落ちて、空虚なばかりであった。

笛ふけど、人は踊らず——。

州郡の長たちが、いかに躍起になっても、人民は、黄巾
党にさからう意志を、全く持たないのだ。

劉備もまた、檄文を黙読してから、その前を立ち去ろう
とした。

その時——。

「待たれい、白面郎^{はくめんろう}」

背後から呼びとめた者があった。

劉備は、頭をまわした。

——これは！

思わず、胸中で、劉備は、叫んだ。

劉備が、生れてはじめて接する威風凜凜たる偉丈夫が、
そこにいた。

城外で出会った張飛という荒武者も、途方もない巨漢で
あったが、べつに威風というものはそなえていなかった。
しかし、いま眼前にいる偉丈夫は、視線を合せただけで、
身がひきしまる。

おどろくべきは、その髯であった。胸に垂れて四尺はあ

ろう。丹鳳^{たんほう}のまなこ、臥蚕^{がまん}の眉、鼻梁の高く豊かな肉づき

——すべてが、常人のものではなかった。

「失礼乍ら、貴公は、何処の貴人が、そうやって、世をし
のお飯の姿になって居られるのであろうか？」

「べつに、素姓をかくして居る者ではありません。私は、
樓桑村に住んで居る者で、十歳から孤児となって、履^{はき}を販
り、蓆を織るのを業としている、凡庸な人間です」

「いいや——」

偉丈夫は、かぶりを振った。

「貴公の風貌は、そこいらの土民のものではない。その秀
でた眉ひとつ視ただけでも、その祖先から享けた血の貴さ
があらわれて居り申す。まず、それがしをして、おどろか
せたのは、その大耳でござる。そのかたちのよさ、肉のゆ
たかさ——尋常のものではない。……かくされずともよ
い。お手前の祖先が、いかなる王侯か、打明けて頂こう」

「……………」

「それがしは、河東解良^{かとうかいりょう}の産で、姓は関、名は羽、字は長
生——近頃は、雲長と改めて居る者。郷里^{かみ}にあって、郡の
長があまりに横暴な振舞いがあり、つい、これを討ちはた
して、追われる身となり、難を江湖^{かうこ}にのがれて、すでに五
年に相成る。……生来、いささかの膂力^{りきりき}をそなえて居り申
すゆえ、風雲をのぞむことしきりでござる。……貴公が、
もし、しかるべき貴人でござるならば、敢えて、その足下

に、膝を折りたいと存ずる」

その真摯な態度を示されても、劉備は、べつに、心をうごかされた様子もなく、

「まことにお気の毒ながら、お手前の見込みちがいでした。私は、ただの履作りにすぎません」

そうことわって、そこをはなれた。

一 剣に誓う

一

「面白くない！」

突如、途方もない大声が、噴いた。

小さな旗亭は、その大声で、ぐらぐらと、地震のようにゆれそうであった。

事実、店さきにぶら下った猪の肉が、ぶるると、動いた。

店内には、数人の客がいたが、びっくりして、腰掛から突っ立つ者もいたし、酒杯を床にとり落す者もいた。

「なにが面白くないのだ、張飛？」

果城東門の守備卒の一人が、訊ねた。

「なにもかも、だ。この世のことは、全部くそ面白くもないわい！」

張飛は、奥の片隅の塩漬肉の大樽の上に、胡坐をかい、嗷鳴った。

酔眼が、据っている。

これほど酔うには、斗酒をくらったに相違ない。

猪を獲って、これを市に売るのを家業としている張飛であったが、一度に七八頭の猪を、長い鉄棒にぶらさげて、かついで来るのも、人々をあきれさせていたが、それで得た金が一文も無くなるまで、何日でも酒を飲みつつける徹底ぶりも、人々をあきれさせていたのである。

「そんなに面白くなければ、どうだ、張飛、猪を獲って来る代りに、黄巾党の頭目の張角の首でも取って来たら——」

守備卒が、からかった。

「うるさいっ——」

張飛は、非番になって、飲みに来ている守備卒三人を睨みつけた。

「おのれら、果城を守る兵卒どもに、申しきかせておくぞ。まだ一度も、黄巾賊の大軍の襲撃に遭ったことのないおのれらは、あの関門の扉は、鉄壁と思って居ろが、とんでもないわい。狡智にたけた黄巾賊にかかっては、紙を破られるように、苦もなく突破されてしまうぞ。せいぜい、その日まで、商人どもをおどかして、鼻くそほどの賄

路をとって、一椀酒をくらっている」

「おいっ！ 猪売りのぶんざいで、大層な口をたたくな。われわれの守る関門の扉が、紙同様だと——。それほど、べらべらに見えるなら、貴様の腕で破ってみろ！」

「なんの造作もないことだ。のぞみとあれば、破ってくれようぞ」

張飛は、ぬっと立った。

「破れるものなら、破ってみせろ」

「ついて来い、虫けらども！」

張飛は、市の辻を横切って、東門へ向った。そのうしろを、守備卒たちは、跟いて行く。

蟠桃河に架けられた石橋を渡れば、東門である。

張飛は、橋袂で立ちどまるや、腰に横たえた長剣を、一閃させた。

河畔に立っていた巨きな楊柳が、ぐうっと傾いた。

凄じい音をたてて横倒しになった楊柳を、無造作につかみあげた張飛は、ぼっぱっと枝を払うや、ひっかついだ。

これを目撃した守備卒たちは、急に、不安になって、顔を見合せた。

張飛は、関門の前に、仁王立つや、

「守備長に、もの申す」

と、望楼に叫んだ。

「この張飛翼徳は、お主の部下ともに、門扉をぶち破ると

約束した。男子が、ひとたび誓ったからには、あとへはひけぬ。修理の代金は、猪十頭で支払ってくれる。……見ておれっ！」

云いはなつや、ひっかついで来たひと抱えの楊柳を、小脇にかい込み、二間の高さの大扉めがけて、突き出した。ぐわあん。

凄じい音響が、白屋の空にひろがった。

「こらっ！ 止さぬか、張飛！」

望楼から、首を突き出した守備長が、真っ赤になって喚いた。

城壁沿いの兵舎から、何事か、と守備卒たちが、とび出して来た。

張飛は、かまわず、楊柳を、ぶちつける。

ぐわあん。

ぐわあん。

厚さ五寸もある大扉が、五突きもされると、めりめりと音たてた。

「張飛っ！ 気が狂ったか！」

守備長は、望楼からとび出して、梯子を駆け降りて来ようとした。

とたんに、張飛が渾身の力をこめた一突きに、さしもの大扉が、ぐらっと傾き、左右の城壁が崩れた。守備長は、はずみをくらって、二間の高处から、ころげ落ちてしまっ